

| | |
|------|---------------|
| 研究区分 | 教員特別研究推進 地域振興 |
|------|---------------|

| | | | | | |
|-------|---|-------|-------------|----|-------|
| 研究テーマ | 慢性腎臓病（CKD）の診断基準となる eGFR シスタチンおよび eGFR クレアチニンをパラメータとした定量的評価指標の検討 | | | | |
| 研究組織 | 代表者 | 所属・職名 | 看護学部・教授 | 氏名 | 荒井 孝子 |
| | 研究分担者 | 所属・職名 | 経営情報学部・教授 | 氏名 | 東野 定律 |
| | | 所属・職名 | 国際医療福祉大学・教授 | 氏名 | 天野 隆弘 |
| | | 所属・職名 | 国際医療福祉大学・教授 | 氏名 | 武田 英孝 |
| | | 所属・職名 | 国際医療福祉大学・教授 | 氏名 | 竹中 恒夫 |
| | | 所属・職名 | 国際医療福祉大学・教授 | 氏名 | 池田 俊也 |
| | 発表者 | 所属・職名 | 看護学部・教授 | 氏名 | 荒井 孝子 |

| | |
|-----------------|---|
| 講演題目 | BMI・体脂肪率からみた人間ドックデータにおける eGFRcre と eGFRcys の乖離に関する検討 |
| 研究の目的、成果及び今後の展望 | <p>【目的】人間ドックデータを用いて、血清クレアチニン値を用いた推算糸球体濾過量（eGFRcre）と血清シスタチンCを用いた推算糸球体濾過量（eGFRcys）の乖離の実際とその特徴について検討した。その結果、乖離が大きい群の特徴は若年者であること、既往歴の有病率が低いこと、検査データが正常であること、やせや標準体型などが示された。そこで今回は、BMI・体脂肪率より検討した。</p> <p>【方法】平成30年4月から令和3年3月までの期間にA施設でドック健診を受診したのべ70,446名のうち、シスタチンCのデータがある62,361例を対象とし、除外項目を除外した60,693例を対象として、BMIから「やせ群」、「標準群」、「肥満群」の3群に分類した。eGFRcre と eGFRcys の乖離の実際、乖離の特徴と各群との関連を調べた。3群間における eGFR 差（eGFRcys-eGFRcre）の平均値を比較するため、各群で一元配置分散分析を行い、多重比較（Bonferroni法）を行った。</p> <p>【結果】eGFR 差の分布より、eGFRcre と eGFRcys の数値に乖離（差）があることが示された。BMIの3群間で見ると、男女ともにやせ群から肥満群にかけて乖離は小さくなっており、40代の女性やせ群、次いで30代の女性やせ群、40代の女性標準群の順で乖離が大きくなっていった。体脂肪率の3群間では、18~39歳女性やせ群、次いで40~59歳女性やせ群、18~39歳女性標準群の順で乖離が大きくなっていった。</p> <p>【考察】以上より、やせ群で乖離が大きくなることが示され、乖離が大きくなる群の因子は、女性、若年であることが明らかとなった。よって、乖離が大きくなるとされるやせや標準体型、女性、若年ではeGFRの検査値を扱う際には対象によりeGFR値が乖離することを念頭に置く必要がある。今後は、乖離が大きくなる年齢群での両者の推算式の微調整が望まれる。</p> |